

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】(小学校)

都道府県名

青森県

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	上北町立上北小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	2	2	2	2	2	1	14	20
児童数	69	60	61	53	75	74	1	393	

研究の概要

1. 研究主題

『自ら学び、自ら考える、確かな学力の育成をめざして』
～個に応じた指導体制・指導法の工夫を通して～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ・全学年 算数
全学年を通じた系統性を明確にすることにより、個々の児童への適切かつ迅速な支援が工夫できるものと考えられるため
- ・3学年以上 社会科・理科 (平成15年度)
個々の教師の専門性を発揮できる教科であると考えられるため
- ・全学年 国語
本校児童の実態から、他教科においても欠かすことのできない「読む」「書く」の重点的な指導が必要であると考えられるため

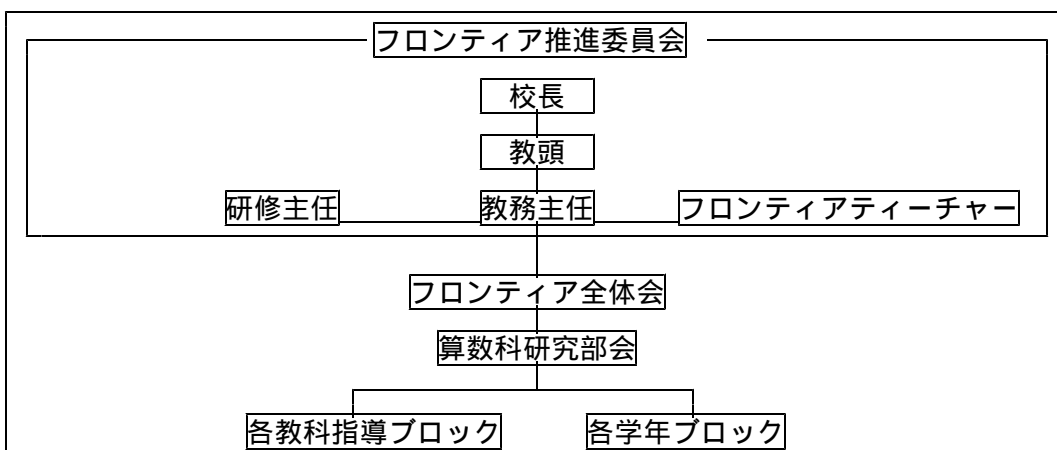
(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 基礎的・基本的内容の定着と、確かな学力の育成 ～個に応じた、きめ細かい支援を行うための体制・指導法の工夫～</p> <p>研究の見通し 校内体制や学習指導体制、学習指導方法を見直し、個々の児童にきめ細かい支援を行うことによって、学習習慣や学習態度が身につく、基礎的・基本的内容を定着させることができるのではないかと。</p> <p>研究の内容・方法 1、校内体制の面で (1) 週時程の工夫 朝自習における「百マス計算」「視写」の位置付け 「ステップアップタイム」の設定と音読指導 「定着タイム」を設定し補充・発展学習 (2) 時間割設定の工夫 「算数」の全クラス全時間 T.T 導入に向けた編成 教科担任制のための「社会」「理科」の学年内の調整 (3) 通知表の工夫 「新しい学力観」による評価を行うための二期制の導入 長期休業中における保護者との「個人面談」の実施 個に応じた指導のために「個人別学力診断シート」作成と配付 (4) 「チャレンジテスト」の実施 長期休業を活用して、定着までの個人差を埋める時間を保障 「個人別学力診断シート」をもとに長期休業中の補充学習</p>
--------	---

平成 15 年度	<p>(5) ワークテスト活用の見直し 単元末の補充・発展学習に向けた単元途中の実施 PCを活用した処理・分析システムの構築 統計化により、指導の客観的評価・改善</p> <p>(6) T.T専任教員2名配置 「算数」全学級・全時間導入による日常的なきめ細かい指導 全校児童データ一括管理による学級事務の軽減 教材・教具の作成支援と協同による教材研究の深化</p> <p>(7) 「個別支援センター」の常設・拡充 学年の学習内容にとらわれない個別支援 異学年同程度の児童によるペア学習</p> <p>2、学習指導体制の面で</p> <p>(1) 算数科におけるティームティーチングの日常化 随時、個別支援・少人数指導が行える環境作り 毎時間の児童の観察・評価と記録の蓄積</p> <p>(2) 算数科における少人数指導の実施 一単位時間内・単元内・単元全体等の実践研究 「理解度別」「課題別」「解決法別」「習熟度別」等の実践研究</p> <p>(3) 社会科・理科における一部教科担任制の実施 学年内における単元を通じた試行 教師の専門性の活用と同質の指導の実施</p> <p>3、指導方法の面で</p> <p>(1) 日常の授業改善 各教科(国・算・社・理)の学習手順の明確化 学習態度や学習のルールなどの学習訓練の徹底 ノート指導の充実・徹底</p> <p>(2) 学習活動の面での工夫 体験的な学習や問題解決的な学習の重視 地域の人・物・事を生かした学習の推進 授業における話し合い活動(練り合い)場面の重視 「書く」活動を日常の授業や学習活動の中で重視</p> <p>(3) 教材教具の工夫 児童の興味関心、感動を喚起する教材開発 地域教材の収集・開発 基礎・基本の明確化と「定着プリント」の作成 ホワイトボードなど話し合い活動の充実を図る教具 問題解決学習の流れに即した板書カードの作成と活用</p>
----------------	---

平成 16 年度	<p>テーマ 自ら学び、自ら考える、確かな学力の育成 ～個に応じた、きめ細かい支援を充実させる体制・指導法の工夫～</p> <p>研究の見通し 校内体制や学習指導体制、学習指導方法を工夫し、個々の児童へのきめ細かい支援を充実させることによって、好ましい学習習慣や学習態度が身につく、確かな学力を定着させることができるのではないが。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>1、校内体制の面で 平成15年度の(1)～(7)の充実を図る</p> <p>2、学習指導体制の面で 平成15年度の(1)～(2)の充実を図る (3)社会科・理科における一部教科担任制については、本校の規模と教員数から見て実施が困難であるため研究内容から除外する。</p> <p>3、指導方法の面で 平成15年度の(1)～(3)の充実を図る</p>
----------------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

年2回のチャレンジテストの結果から
算数科における8月と1月のチャレンジテストの結果は、以下の通りである。

夏のチャレンジテスト 「日本標準:算数A:期末テスト」使用 (2学年:算数Sテスト)												
観点	考え方			表・処			知・理			3領域合計		
	本校	全国	全国比	本校	全国	全国比	本校	全国	全国比	本校	全国	全国比
1年全体	91	88	103.0	94	90	104.4	95	88	108.3	93.3	88.7	105.3
2年全体	65	80	81.3	76	83	91.6	75	87	85.6	71.8	83.3	86.2
3年全体	76	78	97.4	90	82	109.8	78	82	95.1	81.3	80.7	100.8
4年全体	66	80	82.5	73	80	91.3	63	80	78.8	67.3	80.0	84.2
5年全体	68	82	82.9	71	78	91.0	83	84	98.8	74.0	81.3	91.0
6年全体	63	78	80.8	74	82	90.2	79	78	101.3	72.0	79.3	90.8
全学年	71.4	81.0	88.2	79.7	82.5	96.6	78.8	83.2	94.8	76.6	82.2	93.2

冬のチャレンジテスト 「日本標準:算数A:期末テスト」使用												
観点	考え方			表・処			知・理			3領域合計		
	本校	全国	全国比	本校	全国	全国比	本校	全国	全国比	本校	全国	全国比
1年全体	88	80	110.0	93	80	115.8	95	90	105.2	91.8	83.3	110.1
2年全体	77	80	96.3	87	84	103.6	88	80	110.0	84.0	81.3	103.3
3年全体	75	80	93.8	91	82	111.0	92	82	112.2	86.0	81.3	105.7
4年全体	61	80	76.3	76	82	92.7	91	84	108.3	76.0	82.0	92.7
5年全体	67	80	83.1	76	80	95.0	74	82	89.6	72.0	80.7	89.3
6年全体	75	82	91.5	80	82	97.6	76	82	92.7	77.0	82.0	93.9
全学年	73.8	80.3	91.8	83.8	81.7	102.6	85.9	83.3	103.0	81.1	81.8	99.2

- ・全学年における3領域合計通過率の全国比は、夏の段階では93.2%であったが、6.0%向上し、99.2%とほぼ全国並となった。確実に学力が向上しているといえるであろう。
- ・「表現・処理」「知識・理解」については、全国平均を上回る結果となった。
- ・「数学的な考え方」についても、着実な向上が見られる。
- ・これらは、各学期のまとめを長期休業明けに行うというシステムに児童が慣れたこと、また、「個人別学力診断シート」をもとにしながら、個々の児童が長期休業中に基礎基本の定着に努めたためと考えられる。

CRT 教研式標準学力検査の結果から

昨年度の CRT 教研式標準学力検査と今年度（平成 16 年 2 月 5 日実施）の通過率を比較したのが下の表である。（全国平均は昨年度のもの）

学年	観点 年度	数学的な考え方			表現・処理			知識・理解			3観点合計		
		本校	全国	全国比	本校	全国	全国比	本校	全国	全国比	本校	全国	全国比
1年	14	78.2	81.0	96.5	86.4	89.5	96.5	87.4	87.3	100.1	84.0	85.9	97.8
	15	83.3	81.0	102.8	92.8	89.5	103.7	91.7	87.3	105.0	89.3	85.9	103.9
	差	5.1		6.3	6.4		7.2	4.3		4.9	5.3		6.1
2年	14	72.3	71.4	101.3	90.3	88.6	101.9	88.9	80.1	111.0	83.8	80.0	104.7
	15	73.0	71.4	102.2	91.2	88.6	102.9	88.7	80.1	110.7	84.3	80.0	105.3
	差	0.7		1.0	0.9		1.0	-0.2		-0.2	0.5		0.6
3年	14	70.3	71.2	98.7	82.4	81.2	101.5	84.3	81.6	103.3	79.0	78.0	101.3
	15	77.0	71.2	108.1	85.7	81.2	105.5	87.1	81.6	106.7	83.3	78.0	106.8
	差	6.7		9.4	3.3		4.1	2.8		3.4	4.3		5.5
4年	14	54.9	60.7	90.4	79.2	80.3	98.6	78.7	84.5	93.1	70.9	75.2	94.4
	15	69.2	60.7	114.0	85.7	80.3	106.7	90.0	84.5	106.5	81.6	75.2	108.6
	差	14.3		23.6	6.5		8.1	11.3		13.4	10.7		14.2
5年	14	52.9	55.5	95.3	75.4	74.0	101.9	82.7	81.9	101.0	70.3	70.5	99.8
	15	66.2	55.5	119.3	83.0	74.0	112.2	84.3	81.9	102.9	77.8	70.5	110.5
	差	13.3		24.0	7.6		10.3	1.6		2.0	7.5		10.6
6年	14	53.4	57.6	92.7	79.3	80.1	99.0	79.3	80.5	98.5	70.7	72.7	97.2
	15	62.9	57.6	109.2	90.0	80.1	112.4	88.3	80.5	109.7	80.4	72.7	110.5
	差	9.5		16.5	10.7		13.4	9.0		11.2	9.7		13.4
全校	14	63.7	66.2	95.8	82.2	82.3	99.9	83.6	82.7	101.2	76.5	77.1	99.2
	15	71.9	66.2	109.3	88.1	82.3	107.2	88.4	82.7	106.9	82.8	77.1	107.6
	差	8.3		13.5	5.9		7.3	4.8		5.8	6.3		8.4

- ・「関心・意欲・態度」を除く3観点の合計通過率が99.2%から8.4%向上し、昨年度の全国平均を大きく上回る結果となった。
- ・全学年・全観点において全国平均を上回る結果となった。
- ・2学年の「知識・理解」を除く全学年・全観点において昨年度から向上が見られたのは、全校体制できめ細やかな指導を行ってきた成果と考えられる。
- ・2学年の「知識・理解」だけが若干のマイナスではあるが、全国比110%を越えていることから、課題とはならないであろう。また、昨年度（1学年時）の全国比が100.1%であったことから、確実な向上ととらえられる。

冬のチャレンジテストとCRTの結果から

CRTの全国比を見ると、昨年度を20%も上回る驚異的な向上が見られるが、前述した「冬のチャレンジテスト」と今回のCRTの通過率を比較すると次のようになる。（塗りつぶしは、全国平均を下回っていた観点である）

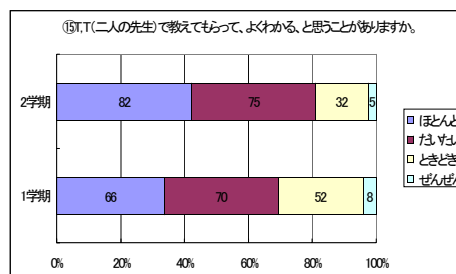
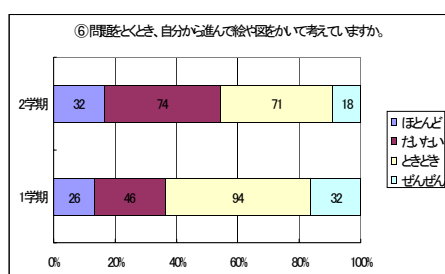
観点 学年	数学的な考え方			表現・処理			知識・理解			3観点合計		
	チャレンジ	CRT	差	チャレンジ	CRT	差	チャレンジ	CRT	差	チャレンジ	CRT	差
1年	88.0	83.3	-4.7	93.0	92.8	-0.2	95.0	91.7	-3.3	92.0	89.3	-2.7
2年	77.0	73.0	-4.0	87.0	91.2	4.2	88.0	88.7	0.7	84.0	84.3	0.3
3年	75.0	77.0	2.0	91.0	85.7	-5.3	92.0	87.1	-4.9	86.0	83.3	-2.7
4年	61.0	69.2	8.2	76.0	85.7	9.7	91.0	90.0	-1.0	76.0	81.6	5.6
5年	67.0	66.2	-0.8	76.0	83.0	7.0	74.0	84.3	10.3	72.3	77.8	5.5
6年	75.0	62.9	-12.1	80.0	90.0	10.0	76.0	88.3	12.3	77.0	80.4	3.4
全校	73.8	71.9	-1.9	83.8	88.1	4.2	86.0	88.4	2.4	81.2	82.8	1.6

- ・この結果から見ると、全校の3観点合計の通過率の差は1.6%であり、冬休み以降に極端に変化したとは考えられない。つまり、全国平均の設定の度合いによって数値にひらきが見られたものと考えられる。
- ・冬のチャレンジテストにおいて、全国平均を下回った学年・観点において、CRTでは、大きな向上が認められる。これは、冬のチャレンジテストの分析を受けて、各学年で重点的に補充・発展学習に取り組んだ成果であると考えられる。
- ・年間を通じたワークテスト等の分析・統計化、個々の児童への支援が確かな学力としてあらわれたものと考えられる。
- ・一人ひとりの児童がワークテスト等をファイリングし、これまでの学習の定着の度合いを確認できるようにしたために、自分なりのめあてを持って補充的・発展的な学習に取り組めたものと考えられる。

算数における「関心・意欲・態度」の調査から
4年生以上を対象に、各学期末に以下の項目について調査を行った。

- ①算数の学習が始まる前に、今日はどんな学習をするのか楽しみだ。
- ②問題を見たとき、楽しそうな学習だ、がんばって答えを見つけようと思いますか。
- ③問題を見て、あの方法でとけそうだと、思うことがありますか。
- ④一つのやり方で答えが出たら、ちがう方法でやってみたいと思いますか。
- ⑤問題をとくとき、まず自分の力で考えようと思いますか。
- ⑥問題をとくとき、自分から進んで絵や図をかいて考えていますか。
- ⑦進んで自分の考えを発表しようとしていますか。
- ⑧友達の発表を聞くときに、自分の考えと比べながら聞いていますか。
- ⑨学習のまとめや大事なことを、ノートやプリントに書いていますか。
- ⑩今日の学習はよくがんばったな、と思うことがありますか。
- ⑪算数の学習は好きだ、と思ったことがありますか。
- ⑫計算問題は楽しいと思うことがありますか。
- ⑬図形や立体の学習は楽しいと思うことがありますか。
- ⑭文章の問題を考えてとくのは好きだと思うことがありますか。
- ⑮T,T(二人の先生)で教えてもらって、よくわかる、と思うことがありますか。

この調査の結果、児童の「関心・意欲・態度」における変容が顕著であると思われるのは、以下の項目である。



- ・「だいたい進んで絵や図をかいて考えている」児童は、1学期までは30%程であったが、2学期には半数以上となった。これは、授業改善を進め問題解決的な学習を重視したこと、また、教材や教具等を工夫し、算数的活動の充実を図ったためと考えられる。
- ・T,Tの有効性については、1学期の段階から高い水準にあったが、T1とT2の交換や少人数指導、コース別指導など指導形態や指導方法を工夫することによって、さらに効果があがったと考えられる。

校内体制の面から

- ・算数の全時間T,T導入により、きめ細かい指導と観察記録による評価と指導の一体化が図られた。
- ・朝自習や定着タイムなど、全校一体となった取り組みにより、児童の学習に対する態度が向上してきた。
- ・ワークテストの集中処理・データ化により、一人ひとりの児童における学習内容の理解度や定着の診断・分析、治療が即時可能になり、個に応じたきめ細かい指導に役立てることができた。
- ・T,Tの日常化により、気軽に互いの授業を参観し合い、研修できる雰囲気が生まれた。

学習指導体制の面から

- ・算数の学習において、T,Tの日常化により、児童の願いにそった学習を進めることができた。
- ・各学年ごとに1単位時間あるいは単元の中で、少人数指導の様々な試行をすることができた。

指導方法の面から

- ・各教科の学習手順やノートの書き方等が全校で共通理解されることによって、授業が改善され、児童の主体的な学習を促すことができた。
- ・各学年の基礎基本を明確にした「定着プリント」を作成し、繰り返し活用することによって学習内容の定着を確実なものにすることができた。

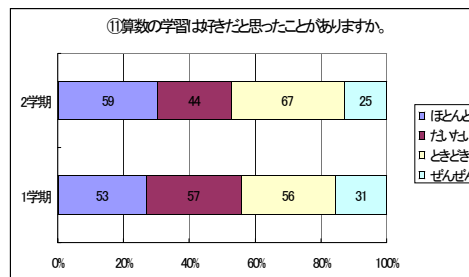
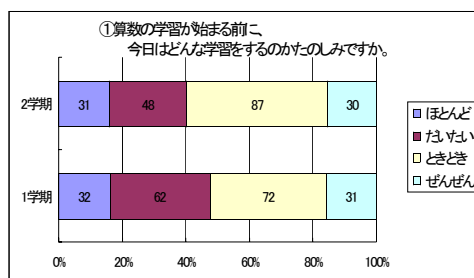
2. 今後の課題

確かな学力の持続と他教科への波及

- ・CRT を基準とした一時的な学力ではなく、自ら学び、自ら考える生きてはたらく力を目指して、さらに個に応じたきめ細かい支援の充実が必要である。
- ・今年度の算数科での成果を教育活動全体に広げると同時に、教師・児童とも過度な負担が生じないように配慮する必要がある。

「関心・意欲・態度」の向上

前述した「算数における関心・意欲・態度の調査」において、「ほとんど」「だいたい」までの値が最低であったのが左下の『算数の学習が楽しみか』であった。



- ・原因として考えられるのは、授業研究や基礎的・基本的学習内容の徹底などを指導者側が重点的に行つたため、児童の側から見ると負担と感じたのではないかとと思われる。単元構成や導入段階の工夫など、児童が見通しをもって学習に取り組めるよう改善が必要である。
- ・学習前の「関心・意欲・態度」の低下と比較して、右上の『算数の学習は好きか』という問いに関しては、全体的に若干の向上が見られる。これは、学習を通して、「分かるようになった」「できるようになってきた」という達成感からくるものであると思われる。今後も「分かる喜び」を実感させることによって学習意欲が向上するのではないかとと思われる。

学習サイクルを明確にした校内体制の整備

- ・朝自習や定着タイム等、週時程の吟味と精選が必要である。
- ・全職員の共通理解と実践及び校務の情報化への対応が急務である。

個に応じたきめ細かい学習指導体制の工夫改善

- ・T.T体制であっても、40人近い児童にきめ細かく対応しきれないことが多く、少人数指導・個別指導の日常的な取り組みが必要である。
- ・習熟度別、課題別、コース別等、指導体制の更なる実践研究が必要である。
- ・「理科」「社会」の一部教科担任制では、成果が見られなかった。年間を通じた研究が必要であると思われるが、本校の学校規模・職員数から判断すると来年度は積極的には推進できないものと考えられる。
- ・国語を中核とした「よむ」「かく」の指導を強化する必要がある。

発展・補充教材の研究・開発

- ・学習内容の系統性に配慮した全学年を見通した基本プリント等の教材開発が必要である。
- ・今年度は補充教材の作成が中心であったが、発展教材の充実が必要である。

学力等把握のための学校としての取組

全校統一したワークテストを使用し、得点集計・成績管理ソフトで集中管理することによって、観点別分析・得点分布分析・S-P分析を単元毎に随時実施

学期毎に「個人別学力診断」および「観点別評価推移」を分析すると共に、データとして蓄積することによって、年度を越えた学力の推移を把握

長期休業後（8月下旬・1月中旬）に「チャレンジテスト」（前学期のまとめ）を実施し、学級・学年・全校の到達度を把握

CRT 教研式標準学力検査（2月中旬）を全学年で実施（3学年以上は4教科）

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- | | |
|--------------------|-----------------------------------|
| ・平成 15 年 5 月 | 上北郡教務主任研究協議会で概要説明 |
| ・平成 15 年 10 月 | 青森県学力向上フロンティア事業推進協議会取組発表 |
| ・平成 16 年 1 月 | 上北町学校教育振興会研修部会で概要説明 |
| ・平成 16 年 10 月 14 日 | 学力向上フロンティア事業公開
(兼中部上北研究委託校発表会) |

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無